

そわにえ Soigner



第12号

「Soigner (ソワニエ)」とは、「世話をする・手当てする」という意味のフランス語です。

2008年1月15日発行

発行/東京訪問看護ステーション協議会 (責任者 森山弘子)
〒162-0815 東京都新宿区筑土八幡町4-17
社団法人東京都看護協会内
TEL : 03-5229-1534・1520/FAX : 03-5229-1524

INDEX/	ターミナルケア研修報告…⑤
さんぼみち……………①	ブロック会報告……………⑥
認定看護師特集……………②	皆様からの投稿……………⑦
ステーション紹介……………④	編集後記他……………⑧



【ニュージーランドの間歇泉】STコスモス 伊波巴子さん撮影

世界の看護師・日本の看護師

—訪問看護業務の自立と協働のために
シエア (国際保健協力市民の会)

代表理事 **本田 徹**



長年内科系の病院勤務医と、NGOの立場からの途上国への医療・保健協力の仕事を、二足の草鞋(わらじ)を履(は)くように続けてきて、自然と、世界の看護師と日本の看護師とを比較する視点をもつようになりました。2007年の9月初旬からも、4ヶ月近くかけて世界一周旅行をしながら、各地の医療現場やプライマリ・ヘルス・ケアの状況を視察したり、講演や「医療・看護倫理」のワークショップを開いたりしてきました。

そこで一層強く感じたのは、日本の看護師、ことに訪問看護師はレベルの高い、よい仕事をしながら、医療制度全体の中で立場的に弱く、自立性や権限を十分に認められていない、ということでした。途上国では、公的診療所(ヘルス・センター)や地域の病院での、日常的なケアや患者教育はもちろん、HIV/AIDSに対する抗ウイルス薬(ARV)を使った治療や服薬指導など、看護師を中心に回っていて、日本で言えば、医師の専権領域とされる医療行為も、彼女・彼らが担わなければ、とても住民のニーズをカバーできません。

一方で、カナダ、アメリカ、オーストラリア、英国のような

先進諸国では、ナース・プラクティショナー(開業看護師)が、制度として確立し、医師との役割分担や協働がきちんとでき、彼(女)たちは生き生きと働いています。

旧友の杉江美子さんのように、カナダに移住して、DV(家庭内暴力)に苦しんでいる母子や、難民やマイノリティの人びとを、地域で訪問看護師として積極的に支えている日本人もいます(注1)。

かつて、この国のバイオエシックスの先駆者である木村利人先生が喝破したように(注2)、日本の看護制度が法的なことも含め、欧米の先進国と比べ著しく遅れを取ってしまっていることが、根本の問題であることは間違いありません。しかし、最近潮目が変わってきているようにも見えます。技と知識とハートを磨き、専門性を高めるとともに、社会的視点や患者のためのナーシング・アドボカシーを確立していく中で、21世紀の日本の訪問看護師が、エンパワーされ、遠からず世界の看護師と業務や権限の面でも、胸を張って伍していける日が来ることは、達成不可能な夢ではないと思います。

注1. 「ホームレスを生きる人びとを支える—アメリカとカナダでの見聞と杉江美子さんの仕事」(Dr. 本田のひとりごと(25)) (シエア・ホームページ <http://share.or.jp> 「スタッフ日記」参照)

注2. 木村利人「いのちを考える」(日本評論社)

